書評

# 徐興慶『国境をまたぐ文化の伝播――朱舜水と近代中国・日本の人物についての文明史観論』

徐興慶『跨國界的文化傳釋：朱舜水與近代中日人物的文明史觀論』

小島 毅

［中国］寧波出版社、2022年

朱舜水（諱は之瑜、一六〇〇～一六八二）は、明朝末期の浙江省余姚県に生まれ、ダイチン・グルン[1]の侵略に抵抗し明の復興を志して東奔西走の末、長崎に渡来して筑後柳川立花家中の儒者安東省菴（一六二二～一七〇一）の援助を受けて暮らし、徳川光圀（一六二八～一七〇〇）に呼ばれて晩年を江戸で過ごした[2]。そのため安積澹泊（一六五六～一七三八）ら光圀家臣が彼に師事する縁が生まれ、水戸学の形成に影響を与えた人物として語られている[3]。

本書『跨國界的文化傳釋：朱舜水與近代中日人物的文明史觀論』（国境をまたぐ文化の伝播――朱舜水と近代中国・日本の人物についての文明史観論）は前半七つの章が朱舜水を扱い、第九章～第十一章が水戸学関係諸論、他に第八章に戴笠（戴曼公・独立性易、一五九六～一六七二）、第十二章に和辻哲郎（一八八九～一九六〇）についての文章を収めている（目次は後掲）。

読者が本書でまず目にするのは斯界の高名な学者七名が寄せた七つの「序」である。そのなかには国際日本文化研究センター（以下「本センター」）の伊東貴之教授の名も見える。徐氏は伊東氏と長年交遊があり、本センターに長期滞在もした。本書第四章の内容は通称「伊東班」が開催したシンポジウムでの発表が基になっている。「序」の執筆者は他に郭斉勇・韓東育・鄭吉雄・銭明・楊儒賓・王俊彦の諸氏。いずれも徐氏の実績と本書が中国語圏の読者に与えるだろう効果をことほいでいる。

ただし、巻頭の郭序が「朱舜水は明末清初の大儒であり、日本儒学および東アジア儒学の開山祖師である」という文言で始まるのは、本書へのサービス・トークであるにしてもやや誇大宣伝で

史実に即しておらず、予備知識を持たぬ読者に誤解を生じさせかねない。

朱舜水を黄宗羲（一六一〇～一六九五）・顧炎武（一六一三～一六八二）らと並ぶ「明末清初の大儒」に祭り上げたのは梁啓超（一八七三～一九二九）であり、亡命生活中に日本での朱舜水の評判を知ったがゆえの故意の過褒だった。

また「日本儒学および東アジア儒学の開山祖師」という賛辞が贔屓の引き倒しであることは、日本の読者には指摘するまでもない。儒学は百済の博士王仁が請来したと『日本書紀』に記録され、[4]遣唐使船で留学した儒学生たちがさまざまな学術をもたらし、博士家や五山の学僧たちが伝承・発展させた。しかし仏教の場合と異なり、中国から著名な儒者が弟子たちを引き連れて布教しに来たことは一度も無かった。その点で朱舜水は、名古屋に来て徳川義直（一六〇一～一六五〇）に仕えた陳元贇（一五八七～一六七一）と並んで大陸からやって来た初めての儒者だった。[5]当時も仏教界では黄檗宗の隠元隆琦（一五九二～一六七三）とその門人たる上述の独立性易や将軍徳川家綱（一六四一～一六八〇）に厚遇されて江戸で布教した木庵性瑫（一六一一～一六八四）、あるいは高崎の少林山達磨寺開山に据えられる東皐心越（一六三九～一六九六）ら、少なからぬ渡来僧がいて明末の思想文化を日本人に伝授している。

朱舜水を特権的に強調するのは、日本でも中国でも近代におけるその時代の要求がしからしめたがゆえのことである。彼が明朝に終生忠義を尽くした遺民であり、また楠木正成を追慕した文章（湊川神社境内の正成墓に光圀の命で刻まれている）を書いたことなどから、国民道徳・民族精神の偶像とされたのだった。そのこと自体は別途近代精神史の問題として扱われるべきだし、その解明に若い世代の研究者たちが挑んでいるところである。朱舜水は十七世紀の東アジア文化交流史を代表する人物のひとりではあるけれども、彼の事績のみを強調するのは危険である。

と、まずはいささか冷や水を浴びせるような書き方で始めてしまったが、徐興慶氏はそのライフワークとして朱舜水に取り組み、彼の既存の文集を増補した『朱舜水集補遺』（台湾学生書局、一九九二年）を作成したほか、すでに多くの論文・専著を公刊してきた。

徐興慶氏は一九五六年生まれ。東呉大学を卒業して九州大学に留学し、一九九二年に「近世日中文化交流史の研究――朱舜水を中心に」と題する論文で博士号を取得した。国立台湾大学で日本語文学科に属して日本史を講じ、同大学に日本研究センターが開設されるにあたって尽力した。二〇一八年に中国文化大学の学長に就任し、やはり日本研究センターを作るなどの事業を推進している。こうした長年の貢献に対して二〇二一年に日本台湾交流協

会から外務大臣表彰を受けた。その人物と業績は斯界ですでに広く知られている。

　著者徐氏自身によれば「本書と前著『朱舜水與東亞文化傳播的世界』[6]（台湾大学出版センター、二〇〇八年）の構想は前後照り映えて、新史料[7]により一段と精密に朱舜水の学問と思想を描いた、border-crossing な東アジアの儒学者たちが multi-linguistic な言語環境で生存と交流をおこなった異域の物語」である（三〇八ページ）。総論にあたる第一章「緒論：朱舜水研究の新地平」が書きおろしのほかは、いずれも既発表のものに基づいている。すなわち、第二章「朱舜水と日本に寄寓していた明末文人の交流」は上海、第三章「朱舜水思想と徳川儒教の発展」は台北、第四章「朱舜水と熊沢蕃山の〝経世致用〟思想の異同」が京都桂坂の本センター、第五章「朱舜水思想と加賀藩の儒教の発展」が台北、第六章「東アジアの視野からみた隠元・朱舜水の文化伝播」が大阪、第七章「朱舜水の科挙制度に対する論評」・第八章「〝儒・釈・道・医〟の独立[8]と中日文化交流」・第九章「『本朝通鑑』と『大日本史』の史観の変化」がいずれも台北、第十章「『大日本史』と日本〝水戸学〟の再建」と第十一章「水戸藩と日本の近代化」が天津、第十二章「和辻哲郎の伝統と〝近代〟思想の転化」が吉林と、日・台・中という「異域」で発表・刊行されている。しかも日本での二つの章はもともと日本語であり、したがって本書自体が「multi-linguistic な言語環境での生存と交流」の成果なのである。

　そのため章立ての順に時間や論理が継続的に展開しているわけではないし、内容的な重複も若干目につく。もっともこれはこの手の書籍にありがちのことで異とするには当たらない。評者が感じたのは、上記三つの「異域」それぞれで基礎的知識に関する説明に濃淡の差が窺えることだ。日本の読者向けにはごく簡潔にさらりとそれを済ませ、台湾ではいくぶんか詳しく、そして中国では日本史・日本文化に関する概説的説明を充分にしたうえで、徐氏自身の研究成果が論述されている。たとえば（本センターで発表された）第四章で熊沢蕃山（一六一九～一六九一）とは何者かの説明的記述はなされないが、第十二章は和辻哲郎についての詳しい伝記的叙述から始まっている。もし両者が逆の地で発表されていたら、その叙述方法も逆になっていただろう。もっとも、朱舜水と熊沢蕃山との比較は本センターという〈場〉だからこそなされたのであり、徐氏が中国東北部（旧満洲）の吉林でこれを試みることはそもそもありえなかっただろう。

　つまり各論文はそれぞれその〈場〉に適切な話題を徐氏がそのたびに選択して披露してきたものであり、本書はその集積である。こうしてあらためてすべてが揃って中国語により発信されることで、台湾と中国の読者たちは江戸時代の日本文化について深い認識を得ることができる。一般に鎖国史観が一人歩きしているであ

ろうなかで、鎖国初期の十七世紀後半にはまだ中国（ただしダイチン・グルン時代の中国）との人的交流が継続し、それが十八世紀末から水戸での海防論を経て幕末の尊王攘夷思想の伏線になっていくさまを知りうるのである。本書の過半は朱舜水という個人に焦点を合わせた論考ではあるが、しかしこの一点を通して十七世紀の東アジア文化交流がもっていた歴史的意義を読み取れるのだ。[9]

特に私が注目したいのは第十章において立原翠軒（一七四四～一八二三）を「中期水戸学」の再興者と位置付け、以後青山延于（一七七六～一八四三）に至るまでの時期を、安積澹泊らの前期水戸学、会沢正志斎（一七八二～一八六三）・藤田東湖（一八〇六～一八五五）らの後期水戸学の中間に置くことだ。従来、前期と後期の時間的隔たりと内容の異質性を強調してきた見解[10]を修正し、両者を架橋して「前後期の水戸学の発展と連続性」を見出そうとしている。この章はもともと二〇一六年に天津で発表されたものだが、同じ頃に東京大学の倫理学研究室が招聘した講演会でも徐氏はこの話をしてくれた。評者も会場で拝聴し、賛意を表する発言をさせてもらった。後期水戸学が帯びる禍々しさ、尾藤正英氏らが国体思想を生み出した元凶として、一方明治維新礼賛者たちが倒幕運動の源流として崇めるその政治性とは距離を置き、十八世紀中葉の中弛み状態を脱して『大日本史』編纂事業を再開させた学術面での功績を翠軒から延于の系統に与えるのが「中期水戸学」論である。正志斎・東湖の師である藤田幽谷（一七七四～一八二六）は翠軒と同時に活躍し、『大日本史』の編集方針で対立して別流派を形成、これが世に言う後期水戸学となる。幕末の政治闘争でも翠軒・延于の門流は穏健派で過激な尊攘派を批判した。

徐氏は慎重にそこまでは書いておらず、むしろ翠軒ら中期と正志斎ら後期を連続的な変化だとまとめている（二六三ページ）が、評者はむしろ両者の断絶こそが水戸学の変質、「前期・中期」対「後期」の構造を把握する鍵だと考える。かつて倒幕運動や明治国家が利用しうるものだったがために、あるいは逆に戦前の国体論を生んだ悪として批判するために、幽谷に始まる後期水戸学が主人公とみなされて来たわけだが、翠軒から延于、そして甥の青山延光（一八〇七～一八七一）に至る流れを単なる傍流・脇役とするのではない水戸学史を描く必要があると思うのだ。徐氏には引き続きそのトップランナーとしての活躍を期待したい。

本書は大陸から出版されたにもかかわらず（徐氏が暮らす台湾で通用している）繁体字[11]で印刷されており、大陸ではしかるべき教育を受けた者のみが読む能力を有する一方、台湾や香港の人には親しみやすくなっている。日本でも今なお旧かな遣いや旧字体にこだわる書き手や学会があるように、どんな文字を使用するか

は政治的・文化的・思想的な態度の表現である。寧波出版社という、日中交流の歴史で最も重要な海港都市のひとつで出版されたことは、同地が朱舜水の出身地であること[12]と併せて、本書の国際性を象徴している。希くは、日本の研究者にも広く読まれて本書の内容が学界の共通認識にならんことを。

注

（1）ダイチン・グルン（daicing gurun）とは漢字で「大清国」と表す王朝国家のこと。日本では長らく「清朝」と称されてきたが、近年こちらが書名に使われてもいる（承志『ダイチン・グルンとその時代――帝国の形成と八旗社会』、庄声『帝国を創った言語政策――ダイチン・グルン初期の言語生活と文化政策』など）。グルンは満洲語で「国」を意味することば。この王朝が満・蒙・漢・蔵・回の諸族で構成される複合国家であった以上、「明朝」の延長線上に中華王朝としての枠組みで処理することになりかねない「清朝」の使用には慎重になるべきであろう。朱舜水が服従を拒んだ大きな理由がその「夷狄」性（＝漢人による中華王朝ではない事実）にあったからには、なおさらである。

（2）明治四十五年（一九一二）に「朱舜水先生終焉之地」と刻んだ碑が水戸徳川家の駒込屋敷跡にあった第一高等学校敷地内に建立され、現在も東京大学農学部に残って文京区の史跡に指定されている。

（3）各種辞典・事典の「朱舜水」の項の説明では、『日本国語大辞典』と『日本人名大辞典』が「水戸学に影響を与えた」、『日本史小辞典』が「前期水戸学の形成に影響を与えた」、『日本大百科全書』が「水戸藩の学問に重要な役割を果たしたことが知られる」、『世界大百科事典』が「水戸藩の学事に協力した」などとなっている。彼と水戸学の関係を評価する度合いがそれぞれ微妙に異なることがわかろう。

（4）これは史実ではなかろうとするのが斯界の大勢だが、中国の書物では『日本書紀』の記録どおり西暦三世紀の「応神天皇」の時の事実として紹介していたりもする。中国語圏での日本文化史認識のレベルを底上げするためにも、本書のような書物の出版は有意義なのだ。

（5）これに五十年ほど先立って朝鮮から戦争捕虜として連行されていた姜沆（一五六七～一六一八）が、当時はまだ仏僧だった藤原惺窩（一五六一～一六一九）に会って影響を与えたことが知られている。

（6）『朱舜水與東亞文化傳播的世界』（朱舜水と東アジア文化の伝播の世界）については、佐藤保氏による書評が『日本漢文学研究』第四号（二松学舎大学、二〇〇九年）に載っている。

（7）「新史料」とは徐氏もその一員だった水戸徳川家に伝わる文書類の調査グループが見つけたものなどを指すだろう。

（8）ここの「独立」は前掲の戴笠＝独立性易で人名。

（9）十八世紀と十九世紀前半には直接の人的交流はほとんど無くなるものの、書籍を通じた交流が興隆し、なかんずく日本から中国への流入が注目される。この課題も若手研究者たちによって究明が進みつつある。本書に朝鮮の記述が無いことは必ずしも欠陥とは言えないが、北京への燕行使、日本への通信使という朝鮮使節たちが書き残した記録もまたこの時期の東アジア文化交流の貴重な史料である。こうした状況は十六世紀以前にも存在し、それぞれに後世への意義を有していることは言うまでもない。

（10）尾藤正英「水戸学の特質」（『日本の国家主義――「国体」思想の形成』岩波書店、二〇一四年に所収）は立原翠軒から後期水戸学が始まるように説いた。松﨑哲之『水戸学事始』（ミネルヴァ書房、二〇二三年）も、翠軒以後の「新たな学風が後期水戸学」とする（二一五ページ）。

(11) ダイチン・グルン政府が『康熙字典』によって正しいものとして定めた字体。日本でいう旧字体のこと。

(12) 朱舜水の出身地余姚県はかつて隣の紹興府に属していたが、人民共和国誕生の一九四九年に寧波市に編入された。ちなみに寧波は近代において寧波帮と呼ばれる遠隔交易商人たちを輩出したし、蒋介石はその南部奉化県の生まれである。今は東海艦隊の根拠地として台湾海峡・東シナ海方面に睨みをきかせている。